

本船と目標との直線上に
敵艦隊を捕捉。
デタ照合により敵主力
第7艦隊と推定。

接触までが
3分27秒。

……ごめん。
今回はやはり終戦を
争れなかった……。

春まじには
帰って来てね♡

ハンマーヘッド 17隻
シールド 13隻
ダックホーン 20隻
現在の装備では、突破は
困難と思われる。

STARBLADE

Namco 1992



STARBLADE
&
GALAXIAN[®] by
EPSTEIN 6

VOL. 17

めにう ~MENU~

3	Mental Ranger	文・長船吉光 絵・ただのりな
7	Damyan=Kizaki's Road of The Messiah.	Damyan=Kizaki
14	読者用ページ《三等雑居室》	
16	プロメティアのページ	淵上哲也
17	学園PBM真鶴学園風雲録 全体リプレイ 真鶴レポート	岬当麻
24	迷想装甲擲弾症候群	紺野紫楼
27	PEACE PRESSER MAYA	文・本居こじ 絵・EPST-DARIUS 6
31	一等喫煙室	空技廠横浜評議会

※「真鶴学園風雲録」に参加するためには、別売りのルールブック（送料込み200円）が必要です。今回は4/25までにアクションを送って下さい。

※EX-SYSTEM関連の記事は就職活動につき、当分の間休載します。

☆ネットゲーム（遊演体／ホビー・データ）参加者の皆様へ

あなたのキャラのリアクションのコピーを一緒に送って下さった場合、本のお代を300円ポッキリ（早い話、切手不要ということ）にします。

「E c h o で 悪 い か ! 」 by 本居こじ

春なのに、春なのに……！悲P話題が多すぎて困る。EX-SYSTEMとただのさんが就職で仕事量の見通しが不安定になるし（これは仕方あるまい。生者必滅会者定離）、第一ヤグアルがまた浪人（あのなあ）！今回から新人“紺野紫楼”（こんの・しろろ？）が入ってエッセー的なものを書いてくれることになりましたが（出身誌はヒ・ミ・ツ！オエ）何にしても失われたものの方が大きすぎますナ。テクポリからのスタッフNo2はどうもポシャったみたいで音信不通だし、もうタツマリマシェン。こうなると、分離独立で営業していたA-Strikeもその意義が薄くなるので、こっちとの合併も考えないとならんでしょう。

「TRAP」方式から「悪魔のささやき」方式への移行——と言っても、わかるのは小西さんだけか。ま、何にしても、いまの「万年五月病」状態を何とかしないとイカンわけですがね。今月も遅くなって、申し訳ありませんでした。

Mental Ranger

文：長船吉光
絵：ただのりな



1992, RINA.

2 (承前) : 乳白色の空間を流れ流され、いつしか平衡感覚を失って発狂しかけたところ、遂にその事態はやってきた。昨晚より一層その大きさを増したトビリシが、再びあの高笑いと共に現われたのだ。ミラマーは腹から声を張り上げた。

「出たな、邪道に墮した売女！」

「言いたいことはそれだけか！」

御幣を突き出して喚き散らすミラマーを、トビリシは高慢に見下ろした。

「いつまでも進歩のないやつよの、貴様も！」

「どっちが！」ミラマーはむきになって怒鳴り散らした。「貴様、まだ生贄を漁っておるのか！」

「余計な世話だ、この世から消えるがよい！」

振り払われたトビリシの右手から、緑がかった白色の霧が流れだした。まったく反射的にミラマーは結界を張ったが、それでも恐ろしいほどの痺れが彼女の体を駆け巡った。

最後に彼女が見たものは、自信に満ちあふれたトビリシが哄笑する姿だった。……彼女は意識を失った。

ミラマーはふとんの中で飛び起きて少しして、自分がまだ神の国の住民になってはいないことを自覚した。じつとりとした粘っこい汗で木綿の寝巻が体に貼り付いていた。懐で何か当るので取り出してみると、まっ黒になってバラバラになった御幣が現われた。折り紙が煤け、柄の裂け目は完全に炭になっている。トビリシの「力」に耐え切れなかったものと思えた。

「何てこと……」

彼女は手の中に御幣を束ね、呻いた。月の光が冷たかった。

3 : 朝早く店を開けに起き出したキサラは、家の奥のあらぬ方でさごそ物音がするので、スタッフを手に音のする方へ行ってみた。……納戸をのぞいてみると、ミラマーが寝巻のままで薙刀を取り出していたところだった。

「ミラマー様、それ……」

「大司教より授かりし、聖なる薙刀」

ミラマーは刃先を日の光に当てて様子を見た。「フェルディナンドとやりあった時もらった……まさか使うことはないと思っていたが……」

「はあ」

キサラはきよとどとなつたまま、薙刀を先から先まで眺め回した。差し渡し2m前後はあろうか、ミラマーより頭一つ分ほど長いもので、さしたる飾りはない。黒漆で塗りこめた檜の軸に鋼の刃が取り付けられている。止め具の竹に巻かれた銀細工だけが、唯一の飾りだった。ただそれもドワーフの細工ほど手が込んだ気の利いたものでもなく、ただ申し訳程度に巻かれているだけのもののように思われた。

ミラマーは懐紙で刃を背から磨きながら、何ごとか呟いていた。「聖なる品」を手入れするときの詞だった。

「……ミラマー、様……」多少ためらったものの、キサラは尋ねずにはいられなかった。「どうして、そんなものを……」

「トビリシは生きておる」ぼそりとミラマーは答えた。「生きて、まだこの辺にいる」

「そんな……」

キサラは口に手をやった。ミラマーは手を休め、息をつくくと、薙刀を携えたまま縁側に出て、腰を下ろした。

「やられたよ」彼女は庭のアジサイを見るときなみに眺めていた。「変身しおった……はじめに灰、それから土」

「そんな……そんな、まさか……」

「考えればすぐわかる。いくらプレスでも、あんなすぐに灰になどなるわけではない……まんまと騙された……」

「……」

キサラは言葉を失った。

「第一このところ毎晩夢枕に立つ……」

「……疲れているのではありませんか……？トビリシとやりあって、まだ間もないことですし」

「そう思いたいところだけど……。店を開けておけ。朝のお勤めがまだだ」

ミラマーは言い残すと、本堂にこもってしまった。重苦しいしこりを払うように首を軽く振って深呼吸すると、キサラは表の雨戸を外しに店に出た。

4：うららかな屋下がりに、ミラマーは店の一番表の机で、淡めの緑茶をなめながらぼっとしていた。旅の者の屋食で混みあうピークはとうに過ぎて、今いるのは町内の若い衆だけだ。それも二三人だけで、奥の方でキサラと世間話に興じている。どういうわけか、町の若い男たちに人気があるのはキサラの方だった。ただその分ミラマーは子供に好かれていたから、別に彼女は気にしていなかった。

キサラが何やらいいかげんな文句を唱えながら、手をこすりあわせた。鳩だろう、とミラマーはあたりをつけてみた。——出てきたものは、今の今まで彼女の懷で丸くなっていたはずの黒トラの子猫である。キサラが柔らかく頭をなでてやって放すと、それは大きくあくびしながらミラマーのところへ戻ってきた。苦笑しながら外に視線を戻すと、猫は彼女のひざの上で再び丸くなり、毛づくろいを始めた。誰が飼っているというわけでもなかったが、いつの間にかミラマーのところに居ついていたのだった。他にも何匹かいる。

ふと気配を感じた彼女は、猫を抱いたまま表に出ようとして、町医者やラングと農婦のカリーニンに出くわした。ふうん、面倒があったな。ミラマーは直感した。カリーニンの顔が不安に満ちあふれている。



「やあ」ラングがまず口を開いた。

「サティ来てないかい」

「サティ？」

ミラマーが聞き返す。サティはカリーニンの一人娘で、今年で六歳になる。

「お主のところにおらんのか？」

「それが来てないんだよ」ラングが首を振る。「どうしたのかと思って授業が済んでから今、カリーンのところへ行ったんだが……」

彼は週二回、自宅を開放して読み書き計算を教えている。大抵の家では子供をそこへやっていた。時々ミラマーたちも手伝いに行くことがある。

「朝、確かに家を出てったんです。ちょっとでも姿を見ませんでしたか？」

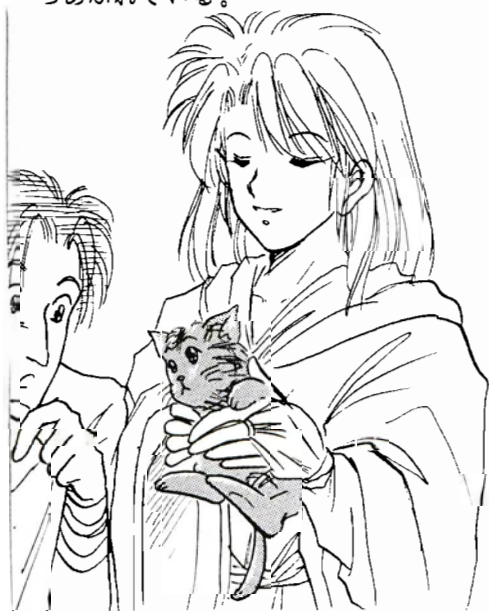
カリーニンの声は、心なしか震えている。ミラマーは一応の立場上、いかにも申し訳なさそうにかぶりを振った。

「いや……今日はほとんど奥におったので……」彼女は店に首を突っ込んだ。

「お主ら、サウスビーの家のサティを見かけなんだか？」

声で気が散ったか、キサラの手からのぞいていたカードの束が、いきなり鳩の大群に化けた。

今日は見ませんが、とキサラが大慌てで鳩を消しながら答えると、他の者も続いてうなずいた。——つまり、誰もサティを見ていない。



「変じゃな」ミラマーはその辺に首を巡らせた。「サティは黙って遊び歩くような子ではないはずだが……」

「まさか、人さらいに……！」

カリーニンは自分で言ったまま、まっ青になって卒倒した。ラングがサッと支える。びっくりした猫がミラマーの腕から飛び降りて、通りをのたくさ逃げて行った。

「尼さん、白湯くれ」カリーニンを抱きあげたラングが、急に医者本来の表情になった。「こんな事もあるかと、気付け薬を持ってきた」

「わかった。……奥の本堂に寝かすがよい」そして、奥のキサラに告げた。

「お湯！」

俺たちはどうする、と若い衆から声が上がった。

「サティがいなくなった」ミラマーがはっきり告げると、今まで陽気に笑っていた彼らの表情が緊張した。「町内をくまなく捜すのじゃ。山狩りを行うやも知れん。他の者にも声をかけ、早く見つけてやれ。……私も出る」

よしきた、いくぞ、と若い衆たちはバラバラ駆け出していった。ミラマーは懐中の御幣を確かめると、彼らが茶代を踏み倒したのにも気付かず、町外れの関所に赴いた。

関所は国王配下の警備隊が、一ヶ所ごとに何人かずつの組を作って守っている。ミラマーは北の方から順に回ってみたが、彼らもそれらしい影は目にしていなかった。人さらいの線もあったが、怪しげな車は朝から一台も通っていない。とすると、あとは町の中のどこかにいるか、あるいはさらわれて山の中を抜けたとしか考えられない。

やはり、山狩りだろうか……ミラマーはとりあえず店に戻る道すがら、思った。あまり大きくはないこの町で、一日中隠れてまで遊びたくなるようなところはないはずである。

店に戻るとラングたちはいなかった。キサラが一人で店を仕舞っていて、捜索本部がレパルスの宿屋に置かれましたよ、と告げた。彼女が術を使って手際よく茶の見せ棚を店内に引き込むの

を待って、ミラマーは聞いた。

「お主、店をどうするつもりじゃ。まだ日暮れまでは時間があるが」

「捜索隊に呼ばれたんです。……長いこと空飛べるの、私だけですから」キサラは雨戸を奥から引っぱり出した。「それにどっちにしてもこの調子じゃ、お客なんていませんよ」

そんなものだろうか、とミラマーは思った。それに構わずキサラは続けた。「ミラマー様にもお呼びがかかっていますよ」軽くウインクする。「山狩りするそうです」

「わかった」ミラマーはうなずくと、襟を正した。「すぐ準備する」

ミラマーの宗教は基本的にアニミズム、つまり精霊崇拜である。信仰対象が身近であり教えもそれなりに単純で、しかも見た目には論理に自己矛盾を起こしていないことから、大衆には広く浸透していた。だから、山に近いこの町で山狩りをやるとなると真っ先に彼女と、もう一軒「本業」で社を開いているところに声がかかるのである。

山狩りを行う時、ミラマーたち神官は山の神または木々の精霊に力を貸してもらおう。そのためにはまず、体を清めなくてははいけない。まず社で汲んだ水を桶半分、頭からかぶる。次いで新しく取った櫛を残り半分の水で清め、それで手拭と衣を洗い、体を拭いてから衣を着る。最後に、もう一度水をかぶる。夏はまだいいが、冬はそれこそ地獄を見る。全ての神の親である太陽の神の加護があつてはじめて無事で済むので、普通人がまねたのではすぐに風邪を引き込むことになるのだ。もっとも、おそれ多くて真似る者はまじないが。

井戸からはじめの水を汲み上げながらミラマーは、待てよ、と思った。もういいかげん水が冷たくなる頃ではなかろうか。刺すように冷たい水をかぶったあとで風に吹かれると、体を切られるような目を見るのである。

しかし、この手順は外せない。南無三。思い切って、ざぶりと頭にあげた。

頭の芯が、痺れた。

(続)

Damyan = Kizaki's *Road of The Messiah*

Road No 5 “Life with madness”

Written by Damyan = Kizaki

Prologue

闇。

“闇”としか言いようのない、無限に続く黒い3次元。

光。

俺は、手さぐりもなしに走る。

どこへ？

闇以外のものが存在する所へ。

俺の足は走る、俺の腕は動く、俺の胸は呼吸する、俺の眼は輝る。

俺の、力の込もった腕は、

闇の中を

無限に伸び

それを

握む。

母。

暖かい……まるで、あの世

(胎内)

にいるようだ……なあ、“母さん”

ふいにそれは消える。

冷たい黒水晶の中。

俺は伸ばす、腕を、力の限り。

足は走る、腕は動く、胸は呼吸する、眼は輝る。

でも、何も無い。

鋭く冷たい、闇の中。

何も無かった。

何も。

俺は泣き叫ぶ。

足は走る、腕は動く、胸は呼吸する、眼は輝る。

泣き叫ぶ。

叫ぶ。

叫

死。

I

ふいに、青色が見えた。

体を起こすと、土色の岩砂漠、遠くに砂砂漠、まっ黒に日焼けした仲間たち…遠くにポツンと見えるハデス。

「やれやれ、夢かよ…」

俺は無意味に頭をかき、グラスを外し、外の光になれていない眼をこすった。

涙？

右拳が濡れていた。Xeusに着いた時以来、全く湿ることのなかった俺の蒼い眼が、気持ちからわいてきた雨に濡れていたようだ。それに何なんだ…このひたすら慈しい気持ち

は…俺は今まで、たいてい怒りや憤り、たまに喜びぐらいしか感じなかったはずだ。この冷たい、切り裂かれるような気持ちは…確か、1回だけこんな漢字を握んだ時があったはずだ。確か…

親父とお袋が死んだとき。

「へ…へへへッ、参ったなコリヤよお…」

俺は、埃まみれの腕で強引に顔をこすると、グラサンをかけ直し、立ち上がって歩き始めた。

…今、俺たちはXeusとは幾分離れた荒地で野宿を続けている。俺達の手に入れた飛行巡洋艦ハデスは、目立ちすぎてXeusには持ち込めないからだ。ならば、俺達だけXeusにいりゃいいじゃねえか、と言うと、そういう訳にもいかないのだ。なぜなら、俺達の身柄保証人であるマディ＝ラングが、あの作戦直後からいなくなってしまったからだ。エリスタンの話によると、波津野の石黒市長と会見しに行った、というのだが…俺達は、ただでさえよそ者視されている存在、こんな状態でXeusにしようものなら…やれやれ、マディのクソ野郎め、帰ってきたらボコボコにしたるかな！まあ、ハデスに関しては、クリスタルタワーの連中に見つかるはず、という理由もあるのだが～ハデスは今、エリスタンと有志数名が改造中だ～…俺が思うに、脱出口ケットで逃げたウエストコーストは、多分クリスタルタワーに向かったんだろう。なぜなら、自らの“家”を奪われた奴の行き先は、自分を保護してくれるところ…つまり、クリスタルタワー以外考えられないからだ。少なくとも、俺だったらそうするところだ。だから、ハデスのことは、もうとっくにバレてるだろう、と俺は思う。まあ、それでも巨大な戦力が手に入ったことだし、今は安心していい時だろう。アボリジニーとの生活にも大分なれたし、貴重な栄養源であるイモ虫を、だんだん美味しく感じてきた。本当に、みんな日焼けしまくって、まるでアボリジニーの“お登りさん”みたいだ。俺はと言うと、いつものクソ暑い服ではなく、あっちから取り寄せてもらったリーヴァイスの501（モチ、ストーンウォッシュ）にバドワイザーのTシャツ一枚といったラフなカッコで、カエルの腹の中のクソツタレな水を飲む生活を送っている。

突然歓声があがったのでふり向くと、家の入り口に立つサファリ姿のナーシム＝追難の周りに、“狩り”をしていたはずの連中がうじゃうじゃ群がっている。どうやら、水を運んできたようだ。それも“普通”の水。そいつらみんな、トカゲだのバナナだのヘビだの、いろんなものを抱えているのがなかなか異様。ま、アボリジニーにとっちゃ、あたりまえの生活なんだろう…

人間の造ったもので生活している俺達とはまるで違い、昔のまま“自然”と共に生きている彼らこそ、この地球を牛耳る資格があるのではないだろうか。考えてみれば、Xeusの周りの空気は、蒸気機関の煙によってひどく汚れている。時にはスモッグが町を襲うことだってあるし、年中埃っぽい。まあ、これには、周りが砂ばかりであることも理由に挙げられるが…とにかく、この時すでに、地球の破壊は始まっているのだ。あと100年ほど経てば、ここも俺達の地球と同じ様なことになるだろうし、そのまま行けば、先は見えてる。やれやれ、俺はXeusをこっちの二の舞にさせないように働いてるのに、これじゃ何にもならないじゃねえか…エイリアン共に、環境保全の仕事でもやってもらうか？しかし、そんなこと抜かしても、皮肉にしかならない。たとえ、このXeus全ての地に俺の声を響かせたとしても、人類が滅亡しない限り、この文明の歩みを止めることはできない。

滅亡しない限り？

考えてみれば、ここの人達の命は、あいつらが握ってるようなもんだ。あの、北京を一瞬にして湖にしてしまった奴らの力…あれは、ここの人達への“見せしめ”だったはず、実力でも何でもない。もし、あいつらを本気にさせてしまったら…

俺達は…墓穴を必死に掘っているのだろうか？

「チッ、…気に入らねえな」

現実逃避だと文句言われるかもしれないが、俺はそのことを忘れることにした。せっかく、みんな嫌なことを忘れてるのに、俺だけ深刻になっててもしょうがない。それに、

俺は、俺達は、体を休めなければならないのだ。ハデスの改造が終われば、マディが帰ってくれば、俺達はまた戦わねばならないのだ。俺達の信念のために、自分の腕を振り上げなければならないのだ。俺達は、“攘夷派”に自分の信念を見つけたのだから、その信念に従うことが、俺達の“人間としての証明”なのだ。

何か足が突っついていて下を見ると、アボリジニーのガキが水の入った陶器のコップを持ってきてくれていた。俺はしゃがんでコップを受けとると、一気に飲み込んでみせた。ガキはニヤリと笑うと、俺からコップをひったくって走っていった。

久しぶりに、風が吹いてきた。とてつもなく巨大な青い空の上を、ちぎれた雲が競争している…

雲の消えた空は、ただひたすらに青かった。

俺は、また寝ることにした。

II

再び、闇が俺を包囲していた。

そのかわり、今度のはせまい。手を伸ばせば、すぐにつかえそうな…そう、3人ぐらいがやっとしゃがめるぐらいの…

そして、ただ暗いだけではない。腐った水の臭い…古ぼけた石にこびりついた、苔の緑臭い臭い…枯れた草の…いや、これは糞の臭いだ…

“橋さん大丈夫かな…”

まるで闇の独房だ…けど、

俺は感じる。

3人。

“しかし、なんで”

感じる…“闇”以外のものが…これは臭いじゃない。これは

“今時糞ベッドなんだ？”

“念”だ。それも、喜びとか楽しさとか、そんないい感じじゃない…これは、

“飯もこんなん”

俺もよく知っている。そう、よく知っている念だ…俺の一生に、

“ばっかりだし”

ずっとつきまとうクソツタレな念。“闇”によく合うエッセンス…

“味方になるって言っても、”

やめろ！そいつを止めろ！畜生、感じたくない…もういい、たくさんだ！

“信用しないし…”

ああ…位、苦しい、つらい、痛い、だるい、気持ち悪い…反吐が出そうだ。

“まあまあ、久木”

やめろ…これ以上、俺を切り刻むのはやめてくれ…痛い、血が出ないのに

“野さん、明日のために今”

全身が切り裂かれている…ああ、暗い

“の屈辱に耐えましょう”

“闇”が、血の出ない傷口をかき分けて入り込んでくる。…いやだ、やめろ…“闇”が

“見てろよウエスト”

俺の体に入ってくる。“闇”が、痛みが、苦しみが、何やらドス黒い“もの”が

“コースト、柔に手に入れ”

俺を支配する。やめろ、俺は“闇”なんかじゃない、俺は“闇”じゃない、断じて俺は“たものは手放すの”

“悪魔”じゃない!! 違う、俺はそんな汚いものじゃない、忌み嫌われるものじゃない、白い目で見られるものでもない。違う、俺は

“も簡単なんだか”

人間だ!!

“らな”
“違う!!”
“あなたは42カ月の間、世を治めるのよ”
“いやだ!!”
“あなたは”
“だめだ!!”
“獣の王なのよ”
“違う!!”
“我らが主に感謝なさい”
復讐。

“あなたは”

III

「違う!!!」
「おわっ！」
突然、俺の目の前から“闇”が消え、代わりに夕陽に紅く染まった砂漠が現われた。見ると、半身を起こした状態の俺の横で、いつもの革ツナギの代わりにTシャツとジージャンを引っかけた藤丸が腰を抜かしていた。
「あんだよ…びっくりするじゃねえかダミーの兄貴！ん、悪い夢でも見てたのかい？」
彼はジーンズについた砂を払うと、こっちを見ながら眼鏡をかけ直した。
「ん…あ、ああ、まあよ。悪イな、驚かしちまって。んで、何か用か？」
俺も砂をパツパツと払いながら立ち上がる。そして、グラスンを同じようにつけ直してみせた。
「ん、ナーシムさんが夕食だつてさ。アオシタトカゲの丸焼きをメインディッシュに、イモムシとカエルのオードブルだつて。一ヶ月前じゃ反吐の出そうな飯だな、ダミーの兄貴」
「ああ、そうだな…とか何とか言って、おめー笑はゲテモノ喰いの趣味あんじゃねえのかオラア!？」
「そっちこそいつも吉原行く前にムカデの丸焼き食ってんじゃないの!?え、凶星でしょ？」
「言ったなてめー、叩っ斬んぞ！そこに直りやがれオラアッ!!」
「おっと、そっちこそ俺のシュートボクシングの餌食だあ！」
俺は、ふざけて逃げる藤丸を追いかけけている時、ふと、笑っている自分に気づいた。ここ数ヶ月、俺の顔の筋肉は緩むことを知らなかった。自分の体に鞭打って、自分達の信ずるものために、機関の前に座り、エイリアン共を憎み、武器を取ってきた俺達に、笑う余裕などどうして無かった。常に、戦いのことしか考えられなかった俺達…だからこそ、今、この時笑っておくべきなのだろう。少しの間だけ、今の自分達のおかれた状況を忘れるべきなのだろう…このままでは、俺達の体は緊張でパンクしてしまうから。
向こうでは、オートマトンのフェイク＝ナーシムが宮本とかいう女をからかっているのを見て、くすくす笑っている連中がいる。藤丸も、まるでガキのように笑っていた。
人は、自分から笑うことはできない。人に笑わせてもらわないと、真に笑うことなどできないのだ。オイルの切れた体を整備し直すのには、やっぱり人
(仲間)
の力が必要なのだ…
きっと、そんな奴らは、貴重な存在なんだろうな。
俺は、砂の海に沈んでいく紅い太陽に笑いかけた。
“できるうちにやっておく”のが、利口なやり方だ。

IV

「…というわけで、私たちディファレンス＝ダイバーの死因のナンバーワンは、自殺なん

ですよ。おっかないでしょう？」

「おう、そうかい。なんなくてよかつたぜ、俺」

あっちの連中が見たら気絶しそうな夕飯を囲む俺達のテントに、ハデスに行っていた波津野のディファレンスダイバー達が帰ってきていた。相変わらず真っ黒な服を着た富山、顔をしかめながらイモムシをついばむ神埼、トカゲの肉の湯気に曇った眼鏡をふく南船、「こんなの腹から水を採るのか？」と焼死した（笑）カエルをつまむジエド、黙々と“普通の食いもの”を選んで口に放り込んでいる西風、そして鼻をつまみながらトカゲの肉を食っている智明…彼は、前の作戦のとき、ハデスの機関の攻性防壁に引っかかってダメージを受けたそうだが、その傷も今では完治しているようだ。

彼らの言う、“情報の海”ってのは、俺にはどういったものなのか分からない。奴らに“どんなものだ”と言って話させても、ミルクのようだとか、脳の後ろに切れ込む匂いがするとか、イメージの流れだとか…何が何だかさっぱり分からん答えしか返ってこない。ま、大体見当はつくが…俺は、“脳”という小さな情報の入れ物に、分子の一個一個にまで情報の詰まった機械的な水が注ぎ込まれ、しかも入れものの許容量を超えてもその水が一滴もこぼれずに注がれ続ける、といった状態なのだろうと思う、“情報の海にダイブする”という行為は。何か、自分で何言っただか分からなくなってくるが…とにかく、南船の言う“ダイバーの死因の一位は自殺だ”というのが、なんとなく分かる気がする。発狂してしまうが前に、その水との関係を断ちたくなる…死にたくなる。

考えてみると、ディファレンス=ダイバーってのは、俺———^{デビルバスター}“悪魔退治人”と同じ状況に立っている連中なのかもしれない。常に狂気の淵に立ち、絶えず“死”の危険が彼らを襲い、そして人々に別人視される存在…しかし、俺とは完全に正反対の点の一つある。ディファレンス=ダイバーは、この世界の裏表問わず、いろんな所に出てこれていた。悪魔退治人は、世の“闇”にしか生きれない。暗いところでしか働けない。“闇”にしか、この仕事に就くことはできない…“生きる”場所が違うのだ。

俺は、奴らに嫉妬している自分に気づいた。

嫌になったので、テントを抜け出して外に飛び出した。だんだん寒くなってきている外は、無数の光点を散りばめた黒い空に支配されていた。新月なのか、今日は月は出ていない。

俺は、テントが見えなくなるぐらいまで離れると、またそこに寝っ転がってみた。目の前に、小さな星達がおおいかぶさってきていた。暗い夜空が

(闇)

さらに圧迫感を与える。こんな、常人じゃ誰でもビビリそうな状況に、俺は快感を覚えていた。いくら否定しても、やっぱり俺は“闇に生まれし獣の王”なのか…ヘッ、んだつたら、42ヵ月の間にエイリアン共をブツ殺してやろうか!?地獄の軍勢引き連れて…

「フン…ヘッ、へへへ、アハハ、ハハハハハハハハハハア——ッハハハハハハハハ…」

俺は狂いそうになった。いや、半分狂ってしまったのかも知れない。自分の運命の残酷さに、悲しさに、どうしようもない暗さに、ここに来てもう耐えられなくなってしまったのだ。今日見た、あの嫌な夢も重なって、今まで緊張していた俺の心が一気に解放され、閉じ込めていた狂気が一気に脳を襲ったようだ。

「ア——ッハハハハハヒューウヒヒヒアへへへへウへへへグエへへへエ——ッ」

悲しかった。いくら外で強がってみても、こんなすぐに心が踊ってしまう俺の弱さが、恐がって身を固めようとしても、“恐怖”を知らないがために、どうすることもできない俺が、自分に対する憤り、怒りを通り超して悲しみに転じていた。涙が出てきた。これは自分のための涙だ。自分を守る鎧だ。悲しみの豪雨から体を守る傘だ…

「…ッ畜生この神のクソ野郎…なんで俺を消さなかった、なんで俺を地獄に落さなかった…なんでお袋を俺の代わりに地獄に落とした！畜生——、ためえ殺すぞオラァーッ!!!」

訳も分からず泣き叫ぶ俺に気づいたのか、テントからラングを持って連中が駆けてきた。バッカヤロウ、アボリジニーと暮らしてるんだつたら、んなモン使うんじゃねえぞ…

だんだん意識が遠のいていくのが分かる。

「鬼崎さん！鬼崎さん！どうしたんですか、しっかりして下さい！」

「どうしちゃったの？ねえ、ねえ!？」

「ダメー!!!」

周りで何やら叫んでいるのは聞こえるが、眼球が落ちてこうとしないので、誰が何を言っているのかさっぱり分からない。クソッ…何か、何か言わねえとこいつら黙らせられねえな…うるさくて寝られりゃしない。畜生…俺はいつまでこの苦しみを味わわなけりゃいけないんだ、ヤハウエの奴…この前祈って損したぜ。

「……すまねえ、みんな」

全身の力という力が、一気に抜けていくのがわかった。

ブラックアウト。

Epilogue

誰がいる…これは、“闇”つつーより、“夜”だな…うっすら、いろんな形の立体の影が見える。

女…煙草をくわえて、火をつけようとしている。その手前の闇に、気配の跡…

男。腕が伸び、女を捕らえ、そして…

消えた。男がいたところには、“風”があるだけ。

泣いている女…肩を激しく震わせ、嗚咽を漏らし、その瞳は濡れかけている。

なぜ？なぜ泣く？己を奪われかけたから？いや、他のものもある。それは

男の涙。泣けない哀れな男の、実体化しなかった悲しみの雨。水…冷たい。

お願い…冷たいから、もう泣かないで…泣くと、冷たく、体が冷える…頭が痛い光…？

「……ん、ん？」

目の前の光景が急に明るくなったかと思うと、どういう訳か、そこはテントの中だった。俺は毛布に寝かされ、頭には

(冷たい)

氷嚢がくくりつけてあった。氷嚢を外して半身を起こすと、決して広くないテントの中に、仲間達が全員、俺を取り囲むような形で座っていた。…が、みんな居眠りしちまってる…あはは、だらしねーでやんの。

と、突然横から声がかかった。

「…あっ、気がついたんですね。よかった…」

「おいおい、こりゃ一体なんのマネだ大田原？」

「ええ、あなたが倒れてからすぐこのテントに運び込んで、掛田さんと刈屋さんに Xeus から氷を運んできてもらったんです…マディ卿を迎えに行くついでにね…」

「…んで、俺、どんくらいくたばってた？」

「夜中ずっとです…もう夜も明けます。みんな、夜通し鬼崎さんについていてくれたんですよ…」

「そう…か、あとで何かおごらにやあなあ」

目の下に派手な隈をつくった彼は、右手に代えの氷、左に濡れタオルをしっかりと持っていた。いくら新聞記者で徹夜になれているとはいえ、こんな“病人”の介抱はきつかったろう…

「ホント、すまなかったな…余計な世話かけちまってよ。もう大丈夫だかつよ、もう心配すんな、ホレ」

大田原は下を向いてだまっただまま、俺にメモの切れ端を手渡した。それを、まだおぼつかない俺の左手にしっかりと握らせると、彼は逃げるようにテントを去っていった。ホント、Thanks, my best fellows....

メモには、こう走り書きしてあった。

☆マディ卿帰る。波津野との協定調印に成功。

☆石黒嶺子…未だ帰らず。

☆我らがハデスの改造、順調に進行中。来月には完成予定。

☆ディファレンスダイバーの捜索により、4人の人質及び3人の裏切り者の居場所判明。

☆クリスタルタワー。そこに全てがある。

「そうか…そうかい…そうかよ…生きてるんだな？そうか…これでやっと、ちいっとばかり肩の力抜けるなあ…おい…」

俺はメモを握りつぶすと、フン、と鼻で笑った。

それから一週間、俺は目覚めなかった。

短い、ほんの一瞬の短い間だが、俺は完全に“悪魔退治人”を“休む”ことができた。

BGM: Es Durのピアノ線～White wind from Mr.Martin～Give me the Pleasure (by X)～Golden dawn (by Yngeie=Malmsteen)

To be continued

あとがき

今回は酔っ払いが書いたもので、何が何だかさっぱり分らないと思います。どうせまた、“こんな書き方やめろ”なんて言われるかもしれませんが、…まあ、ホントに酒呑みながら書くのもうやめとこ。頭痛え…明日学コ出なきゃなんないのに、どーすんだよ…今、午前3時40分…ま、酒に吞まれてないからまだいいけど…

もう1つ、酔っ払いから一言。俺はそちらさんとは、好みがまるで違うので、果たして那由多に少なからず好意的なのは俺しかいないでしょう。読者もクレギの投稿してるみたいだし。まあそれはそれでおいといて、さすがに先月の“開き直ってる”には、正直言って大いに怒らせてもらいました。“嫌なら、やめればいい”と言われてそうなのでやめときますが、はっきり言います。人の好みにケチつけるのはやめてもらいたい。たとえ嫌いだからって、それは単に好みが違うだけ。何か、本の紙面を借りてまで攻撃する理由でもあるんですか。事務ミスが多いから？確かに俺も喰らいましたよ、そんならい。けど、まだこういった全国ネットのゲームは、試行錯誤の段階じゃないんですか。それに、俺達は多少目をつむった上で、純粹にこのゲームを楽しんでるんです。クレギやってる人も同じはず。

言わせてもらえば、俺はクレギをおもしろいとは思いませんよ、なぜなら好みが違うから。好みが違うから、こっちをやってるまで。俺にはクレギを攻撃する資格なんかないし、しようとも思わない。参加して嫌だったら、やめればいい。金とかの問題じゃなく…つまねえものをずっと1年つままないまま過ごす気は、俺にはないね。

もうほとんど酔った勢いで書いてますが、最後にこれだけは言わせてもらいます。

「でっけえお世話だ」

3月19日早朝

酔っ払いの鹿島久義

☆ワープロ代行 笠原和子から

来たーッ！ ……何かと思うかも知れませんが、今回ははすっごくいい出来。私好きだな、こういうノリ。「都合いいこと言うんじゃねえ」とか怒られそうだけど、これはホント。今までで一番ムダが省けてて、しかもムリが少ない。いい傾向ですよ。これからもこの調子で来たら、こりゃ本物。

時に大瓦組その他の暴力団が解散しましたが、これには提督のキャラも一枚かんです。……と言っても、対立関係について、和平派と反対派とで殺気立っていた会合場（料亭）に装甲車で突入、一気に場を白けさせただけです。あまりにトートツなので、アクションかケタ本人がポカンとなる始末。これだからなア…。今度は「トートツに」Xeusへ殴り込んでもらおうかな（苦笑）。

三 等 雑 居 室

今回から私こと菊地の独断により、このページを「三等雑居室」と名付けて、私信などから適宜抜き取ったものを掲載していきます。クレギオン／那由多関連の個人情報も従来通りここに載せていきますので、よろしく。

中古車。

☆古い車はやめた方がいい。なんぼ金があっても足りへん。

S58年型ビスタを20万で買いました。しかし走行中はいいけど止まるとマフラーから真っ白い煙が出ます。自動車工場（買った店）へ持っていくとエンジンが悪いということでした。その時ちょうど追突されて廃車となった60年型カムリが工場にありました。車体は死んでるけどエンジンはエンジンは生きているということで、カムリのエンジンを10万で買ってのせかえました。その後もマフラーに穴があいたり、グリースがあふれたり故障つづきです。おまけに車検が1年ごとだ～。

でも、高速を120km/時で走れるし、（ハンドルにキュッ、キュッというみよーな音がするようになる）冬は不凍液のかわりに軽油よりさらに安い灯油をまぜればOKだし（やっぱディーゼル車は強い！）「この車、車体は58型ビスタだけエンジン60型カムリなんだぜ！」とじまんでくれるし、（単なるバカ）故障しても廃車場にスペアパーツがいくらでもある（なんかむなし）（愛知県・井村和正）

㊦：……カムリってディーゼルだったっけ!?トヨタのディーゼルって、トラックとクラウンのバンしか無いとぼっか思ってた。もともとアンチトヨタなこともあって、よく知らないんだけど。宇垣のZⅡはよく走ってるみたいですよ。ムリしてないし（東京の道路でムリすんのは、自殺行為でしかない。まして単車）、あまりいじってないし。……金がないのでいじれないという事情も絡んでるんでしょうが。こないだブレーキオイルを「DOT4」に交換したとか言ってましたが、私はよく知りません。でも、車は70年代くらいのがベストだったと思うよ。それより前は「楽しいけれど、力不足」でしょ？それから後はコンピューターとか要らないものがゴテゴテ付いてきてるし、悪いことにそれがダメになると車ごとダメになるからね。……でもひと昔前は「100馬力」って一と「オオ凄げえ」の世界だったのに、今やヘタな軽ターボでも100近く出すもんなあ。事故がひどくなるわけだ。160台玉突き事故なんてのがただのさんとこのお膝下で起きてるし、ああ、もう！

クレギオン。

☆（前略）話は変わって、アドバイスありがとうです。そうか……イモ系ってのがあるんですね……。しかし、せっかくのお言葉に私なんか役にたつかどうか問題だなあ（苦笑）まあ土地はあんまよくないけれど、今のところここでやってくつもりでいます。なんとしても「星の民」と接触するまでいつづけてやる一つっつ!!と私の頭の中でミュウが叫ぶもんで。（東京都・左海忍）

㊦：今回私はアクションを送り忘れたので（←大マヌケ）、いつの間にやらヴァニーはライエに行っていたのでした。Q1リプレイ欲しい人いたら言って下さい。龍退治関連です。さて、キャラクターが作者の意向に反して自己主張を始める事を、また、作者がその言われた通りにしないとどうも違和感が出るようになる状態を俗に、「キャラクターが立つ」と申します。ミュウさんはその点早くも「立って」いるようで、いいことですねえ。私のなんか、↑の事情もあって未だにつかめません。那由多における「日向玲子」は、私が「違うんだけどなあ」と思っただけでもどンドン先走ってて。今や「標準」とは別の、もう一つの人格になってしまいました。ヴァニーもそうなるのかなあ。その点シナリオ#1の時のレイコ・ヒュウガは思い通りに動いてくれたのですが。

遅れ。

☆たいへん遅れまして本当に申し分けない。3/19に投函して、EPST一同は「ぼるぶんて全快記念 お祝いツアー」と題して、一週間ほど長野、飯田、諏訪、善光寺方面へ旅行に行っていたのです。それが終わって3/30ごろTELがあって原稿が別サークルの方にまわってしまったのが分かったのです。かけもち先のサークルの会長は菊地〇〇様で、けっこう間違えるんですよ。それで速達で送り返してもらったら、肝心の小説部分がナイ！問い合わせたら、「なくしてしまった」の一言。私は一時間ほどその場（自分の部屋）で石となってしまうました。そこへ貴方のTELが……てな訳です。幸いにも、表紙とPPM関係は無キズならずとも（水にぬれてボヤけてしまった所がけっこうあったので修正した）全部あったので、こうして送る事が出来ました。以上のように、今回は、表紙&PPMのみです。小説は（マンガは）、EPSTの連中が「吉野屋の牛丼2杯」で次回までに復活させてくれるよう頼んだので、よほどの事が無い限り次号にはぼるぶんて作のRPG用小説が載ることでしょう。（岐阜県・EPSY-DARIUS 6）

③：今回は参った。表紙が無いから強行刊行にも踏み切れないし。そうか、電話通じないなどと思ってたら（あの数日前から2～3度ほどかけてた）旅行行ってたんですか。いいなあ。私なんぞ休み中ずっと図書館のバイトで、学校に通い詰めでした。おかげでバイト代がたまったのはいいけれど（今月は7万で普段の倍）、つまらないことこの上ない。温泉でもゆっくりつかりたいなあ、などと思う次第。

しかし、EPSTさんはどいいうところに通ってるんで？「ぼるぶんて」さんにしても何にしても、歳のワリにやたらイイ車乗り回してたり、その割には吉野屋2杯（特盛にしても1200円前後）で懐柔されたり。不思議だなあ。

指摘。

☆遠投神社ですが、多分「遠投町」にあるからでしょう。（愛知県・井村和正）

③：ア、遠投か。これは読み違い。猿投じゃないワケね。失礼！

☆（前略）FS-A1STとは……PANASONICが生み出したMSXの最上位版。別名MSXターボRと言い従来のタイプは8ビットであったのに対し当機は16ビットマシンとして生まれ変わりました。上位互換のため事実上全てのMSXソフト使用が出来ます。（中略）あらゆる面でターボRはMSX界の頂点に立ち、最高の性能を誇っていました。が昨年12月にある新機が発売されました。その名はFS-A1GT。新ターボRとして名を轟かせ、A1STの倍の512KBのメインメモリーを持ち、MIDIが搭載され、A1STの発売よりちょうど一年後にそれを上回り最上位機種となりました。

そしてA1STユーザーはA1GTに買い替えたり、他の機種へ移る人も数多くなり、今やF1STは三日天下で伝説が終わり忘れ去られたマシンの一つと言えます。（本当かどうか知りませんが……）（千葉県・小西清彦）

③：なるほど、DC-7みたいなものですね。て、余計わからなくしてどうする。MSXならMSXと言ってくれば、すぐわかったんですがね。

会 合 予 告

①4月12日に、厚木で基地祭があります。これにかこつけて、空技参加者のお茶会などもやろうと思います。空技スタッフ全員出席というのは絶っつ対にできない事情（スタッフは知っている）があるので……横浜空技からは私、菊地だけです。9時ちょうどまで、相鉄相模大塚駅の横浜方面ホームの一番横浜よりの端で今号を持って立ってます。

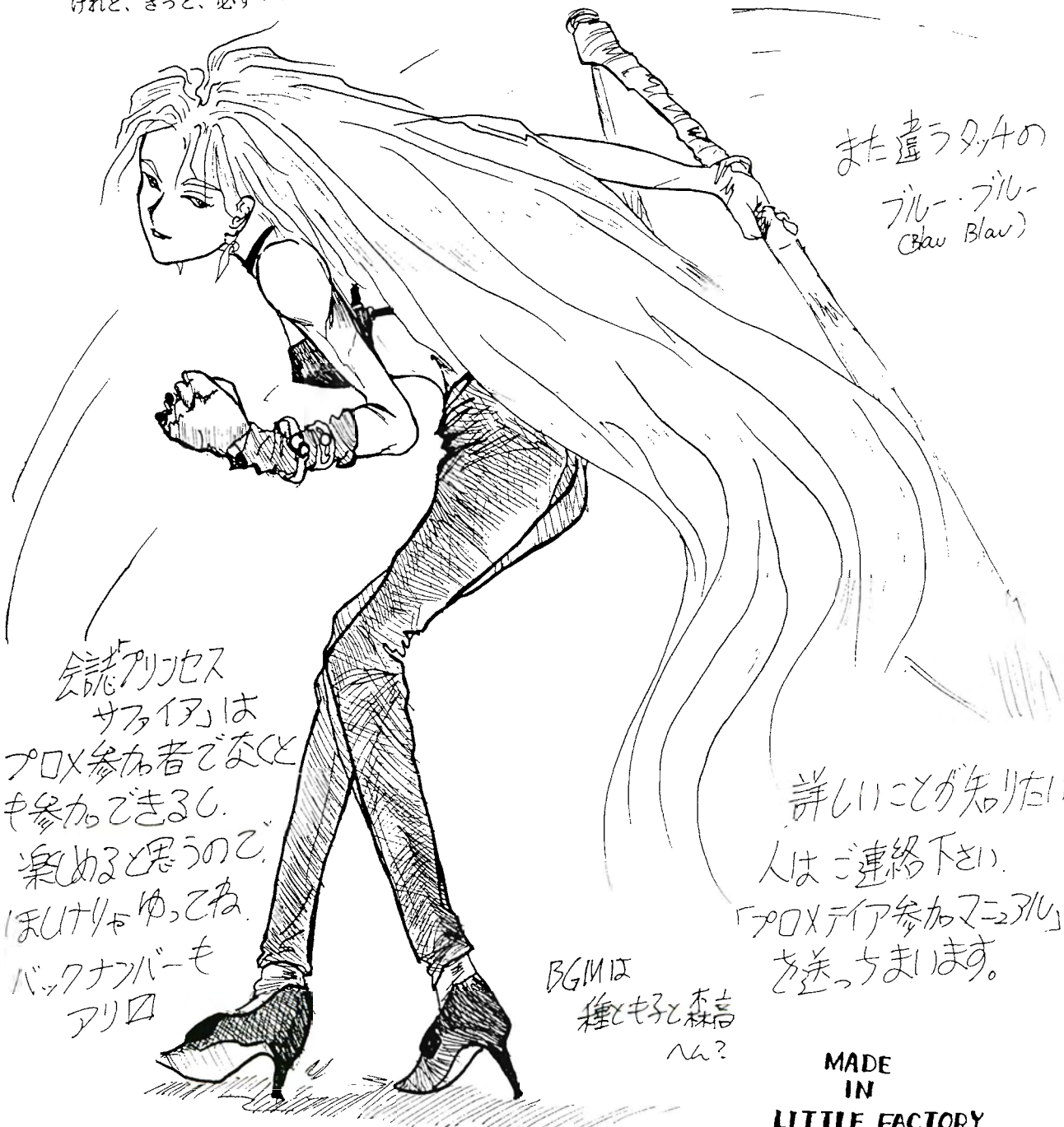
②夏休みごろ（7月末の予定）に、箱根へ温泉つかりに行こうと思います。便乗して徹夜（多分私はもたないとは思）ゲーム大会などもやろうと思っています。宿の予約の都合があるので、今月中に参加／不参加調査を済ませます。行きたい人は言って下さい。

予算は、一泊二食付きで5～6千円程度です。

プロメテアって何？

プロメテア代表の『るー』ことブルー・ブルーです。この3月はプレイヤーが放浪していて、留守をアリア・アニマート君に任せていて帰ってきてから聞いた話なんですけれど。アリア君の元にあるプレイヤーさんがプロメの『下部組織を作っているいいですか？』と連絡が入ったので、それに答えてアリア君は『下部組織なんていわずに、プロメを食ってしまうような組織を作ってください』と言ったそうです。その後そのプレイヤーさんから、うちの方に届いたお便りはその組織の結団表明で、文面からは楽しいな雰囲気が漂い、よんでるこちらにも楽しくなるようなものでした。そこで思ったのが、プロメテアもいつのまにか組織なんて枠をいつのまにかはみ出してしまい、しだいにムーブメントとして存在し始めたという事です。やはりプロメテアは海でした。青い青い海、みんなが自由に好きな船を浮かべることができる海。もしあなたが北の水をみたいのなら、この海は南風を送るでしょう。西の大陸を目指すのなら、悠久の海流へと貴方を導くでしょう。

今プロメテアはモレン、セラデ、インナラで活動しています。星の民とクレモラ人はしょせん異質な民族です。まったくとっていいほど違った二つの民族の出会い。その出会いを決して不幸にしないためにプロメテアは母なる海のように何かを生み出すでしょう、何を生み出すのか？それは今の僕にも分かりませんが、きっと、必ず・・・



また違うタイプの
ブルー・ブルー
(Blau Blau)

会議「アリス」
「サライ」は
プロX参加者でなくとも
参加できるし、
楽しめると思うので、
ほしけりゃゆるこね。
バックナンバーも
アリロ

詳しいことが知りたい
人はご連絡下さい。
「プロXテア参加又=23」
を送ります。

BGMは
種と森高
ん？

MADE
IN
LITTLE FACTORY

真鶴レポート

「せやせや、もーちい翼寄せて。もーちい、もーちい」

早坂理絵のF-100Dの横で、井村真知子のT-4が悪戦苦闘していた。戦闘行動の基本中の基本、編隊飛行の練習である。今までは伊藤早苗とハリヤーで単機飛行するだけだったから、結構進歩したことになる。はじめの頃にはあわや翼が接触して、共に相模湾寒中水泳をやらかす破目になる寸前まで行ったことが一再ではなかったほどだ。

井村はまた一方で、自分の護衛艦「まや」の操艦訓練にも出始めた。ちよくちよく女子部の領海を「侵犯」しては戦闘訓練をやっていく菅原に何か感じるところがあったのだろう。船団護衛用の小型艦でもあるので、男子部まで出張することは無かったが、まあ、人並みのことはやり始めたのだった。

……「DDTもいいが、危険だしアシがつき易い。それよりアンモニアや一酸化炭素のようなガスにしないか？簡単だし、保存も楽だ」

ある日、沖田征士は鳩山平和にそう言ったことがある。しかし鳩山は首を振った。「考えたんだ。影山の本当の狙いは何かってね。……彼は、この学校の影にあるウミを絞り取ろうとしているのかもしれない」

「ウミ？」

「……風紀委員さ。一去年の『勅使河原事件』の事もあろう。彼は……風紀委員を潰して、本当の意味で自由な学校にしようとしているのかも、しれない」

「勅使河原事件」は、今でも生徒の間で語り草となっている大事件だ。2年前、当時高2だった風紀委員長の勅使河原規子が、突然校内に地对地短距離ミサイルを持ち込んで東京と大阪に目標をセット、寮の生徒を人質に取ってたてこもったのである。実は勅使河原の実家は東京でも有数の大暴力団の組長だったのだが、巧妙に隠匿されていたのだ。ミサイルはそこから、ブラックマーケットを通じて密輸されたものだ。事件は結局自衛隊特殊部隊の治安出動で政治的に揉み消され、末端組織一つがまるごと潰れたところで落ち着いた。本当は計画段階から規子本人が中心に立っていたのだ。彼女の目的はただ一つ、「強い日本をつくること」それだけである。

その時全面的に規子に協力したのが、風紀委員会である。彼女は新興宗教をバックにして委員たちを洗脳し、完全に手駒に加えてしまったのだ。現在、風紀委員長は規子の腹心である三河政己（女子部・高2F）が務めていて、洗脳こそなくなったものの、校内では完全に「浮いた」存在になっている。しかしまた、「表向きの仕事」もガッチリと処理しているから、彼らをあからさまに批判することは自殺行為でしかない。

「……考えすぎじゃないのか？」周りを見回しながら、沖田は言った。自然に声も小さくなる。「まさか、あの影山が……」

「そう、確かに考え過ぎかもしれない。だけどねレストレード君、事と次第によっては、おれのDDTはそっちに向くかもしれないぜ」

校内の混乱は、影山が何もしなくなったという事で、一層増幅されていく。

初雁は「秋月」の艦橋から「相模」を文字通り見上げていた。「大和」型戦艦である「相模」は女子部艦隊の給旗艦、すなわち栗田榛名の乗艦である。相模湾での艦隊行動訓練で航行中のそれを見るにつけ、初雁はともすれば我を忘れそうになるのだった。勿論、感動のあまり。榛名は旗艦設定にも見られるように大艦大砲主義で、初雁も程度の差こそあれやはり同類である。「大和」、それもボテボテに対空兵装を装備した最終型は、その「御神体」とも言えた。いくつか追加されているハーブーンの発射筒とファランクスは、さしずめ寄生虫といったところか。

それを現実に戻すのが、レーダーに表れては消える影である。正体はハッキリしている。風紀委員の息がかかった連中の艦艇だ。彼らはこちらの行動を逐一追跡してアラを探し、何とかして榛名たちを現在の地位から引きずり落とそうとしている。現在、模型部長(=生徒会長)は男子部の松平義弘(高2G)がやうているが、実権を握っているのは栗田榛名と宇垣麻美なのだ。立候補さえすれば榛名にせよ宇垣にせよその場で当確なのだが、何故か彼女たちはそれをしない。それがまた風紀委員をいらだたせている。20世紀後半の一触即発の冷戦状態は、いま、真鶴に縮図となって存在している。生徒会は国連と言ったところか。強い権限を持つてはいるが、行使できずにいるから。

菅原はやはりその日も女子部の領海に出かけていたが、その時は目的が異なった。鳩山も同航しているが、その目的の方は知らない。

「そろそろやめた方が良くないか、女子部の方も風紀委員対策でピリピリ来てる。いきなりズドンで来るかもしれないぞ」

「心配いらぬさ、向こうもこっちのことはよく知ってる」菅原は平然としていた。「大体、女子部に殴り込みをかけようなんて言い出したのは、カズ君じゃないか」

「とは言ってもなア」

そんなやり取りが何度かあったうち、ついに女子部の護衛艦が触接してきた。艦番号から見て、中学校の艦らしい。艦番と艦長をリストで照合して、菅原は呟いた。しめた。

「井村さん、ゲームまだある？」

マストのメガホンで彼が呼び掛ける。……鳩山と井村は、ほとんど同時にズッコケた。ことこの話題となると、無線を使う訳には行かない。風紀委員が無線通話を監視(聴?)しているからだ。彼女は菅原の「なまはげ」のすぐ脇に「まや」を寄せると、ウイングに出た。菅原の方も出て、肉声で会話できるようになる。

「……あの野郎……」

鳩山は周囲を警戒しながらも、恨めしそうに彼らの方を横目に見るのだった。

なんとか交渉を付けてカードゲームの「影山とゆかいな仲間たち」を手に入れた彼だったが、売れない理由はすぐわかった。ゲームシステムが、真鶴の内部事情を知らないという理解できないのだ。しかも、「影山問題」を知らないとうわらないギャグカードが含まれている。これでは学校外部では魅力に欠ける。内部では逆に、怖くて買えない。

坂井法子はまたぞろ狂ったように本を読みだした。F-15に関する本なら、マンガから専門書まで、手当たり次第読んでいった。そして、一つの弱点を見出したのだ。ヒントは初雁の手持ち本の、F-15パイロットのマンガである。彼女にしてみれば波動砲並みの大ヒントだった。これではるなに勝てる。坂井の頭はそのことだけで一杯になった。

あとはそれをいかに有効に使うかだけである。前の「武者修行」でF-15に乗る内部生の知り合いはだいぶできていたから、模擬空戦の相手には困らなかった。勿論、坂井自身はF-18Cを使っている。一週間ほどで何とか自信がついた。

そして、ある日。彼女は三たび仕掛けた。今度は不意打ちはなしにした。彼女としてもはるなのクセはあらかじめ理解したつもりになっていたから、今度こそ勝つ自信があった。

はるなは例の4機で飛んでいた。その横へスツとつける。

「またあんた!？」はるなはいいかげん呆れていた。それが声にも出る。「ここんとこ風紀委員対策で、こっちも忙しいのよ。また今度にしてくんない？」

「今日こそ負けませんかからね！」

坂井は聞いていなかった。

「まあ息抜きにはいいんじゃない？」扶桑がけしかける。

「こんなことしてる場合じゃないんだけど……」

「かまへんかまへん。どうせ、すぐ終わすんやろ？」霧島がさらに突き付けた。「さて、そこでブックメーカー。今日の賭率は……」

「アホお、賭けになっか。誰だってハルに賭けらあ」長門が混ぜっ返す。

何だかんだで、結局はるなは編隊を解いた。

例えF-18相手でも、坂井のクセをガッチリつかんだはるなにとっては何でもない。彼女にとって「相手」の基準は機体ではなく、それを使うパイロットなのだ。坂井はまだ、その点を見抜けずにいる。終始尻につきまといわれた坂井は、いかげん焦った。エンジンとエアブレイキを巧妙に使いこなすはるなは、高等機動一つ使わずピッタリついて来る。……一つ、気がついた。レーダー警報音が鳴っていない。あの気に触るブザーが鳴っていない。ということは、はるなはレーダーを使っていない。……しかし、雲に逃げこむことはできない。MF機でそこまで上がることはできないのだから。

「ああ、もう！」

ヤケになった坂井は、方向舵ペダルにあたり散らした。怒りに任せて蹴っ飛ばす。……機体はいきなり急激なスピンに入った。

「な!」「げ!」

坂井自身考えていなかったのだから、はるなに読めようはずはない。あっという間にオーバーシュートして、位置関係が一転する。一時期高等機動でムチャをやっていた坂井のこと、すぐに姿勢を立て直して、なんとかこのチャンスをものにした。

「ありゃりゃ?」これは長門である。「今晚雪かな」

「……腕上げたわね」

実情を知らないはるなは背筋に冷たい異物を感じて言ったが、その後気持ちヨタっている坂井機を目にして、何となく悟った。これはマグレに違いない。けしかければ、ボロが出るだろう。負けず嫌いはるなも同類だった。

「あと2本残ってるわよ」

「あっちゃー……」長門が額を押さえる。「本気になっちめーやんの」

もちろんそれは坂井にも聞こえていたが、一本取ったということが気を大きくしていた。

「じゃ、行きます！」

「……うん、根性だけは褒めたげっけどね……」

ちょっと横転して行き脚を殺したかと思えるや、あっという間に坂井の後ろを取った。あ

とはどれだけ加速しても、またスパイラルダイブから横滑りさせてS字スプリットへ持ち込んだり、文字通り何を試みても引き離すことすらかなわなかった。エアブレーキを立てても、向こうの方が効きがいいので立場は変わらないのだ。結局1本取り返された。やっぱりマグレだったか。はるなは確証を得て会心の笑みを漏らした。

「かなわない」坂井は観念したが、あえて懇願した。「もう一回！正対戦でやらせて下さい、お願いします！」

「??????」意表を突いた願いに、はるなは呆気に取られた。「いいけど……？」

やった。まだ勝ち目はこっちにある。坂井はためらうことなくフルバーナーにスロットルを入れた。急加速でまっ白なベーパー（水蒸気）が景気よく機体の後ろで渦になる。

「……ちょっとアンタ、私と心中する気!？」はるなはレーダースコープ上の表示で危険を感じてそう叫んだが、次の瞬間には別の答が閃いた。「……ア、なァる！あれ！」

はるなもフルバーナーに入れた。やはりベーパーが渦を引く。もしあれだとすれば、対抗する手はあれしかない。成功するかはほとんど賭けだが。読みが当たるかどうかと併せて、勝率は1/4。悪くないレートだろう。

両機がすれ違う。坂井機の上を、はるな機が飛び越える形で。次いで、坂井のF-18のキャノピーが弾け散った。衝撃波に耐え切れなかったのだ。風圧とショックで彼女は座席に叩きつけられた。ヘルメットにマスクをしていなければ、その場で射出されていたところである。

はるなは攻撃の手を緩めない。間髪を入れずオフセット・ヘッドオン・パスで急旋回してすぐ後ろを取り、一斉射を浴びせた。そこまでやったところではるな機の右エンジンが止まる。衝撃波でダクト内の空気が乱れ、エンジンが焼き付きを起こしたのである。細かい原理はここでは省く。

「フイ」はるなは額の汗を拭った。「何とか間に合った」

もちろん、この勝負彼女の勝ちである。3本が4本になったところで幕になった。当分ははるな機のパーソナルマーク、「捻じ山桜」（尾翼の外側にある）が夢に出そうな、坂井だった。

一方、カナダ・ヴィクトリア市郊外—————

その日も伊藤早苗は、ザラに起こされた。「赤毛のアン」さながらの屋根裏部屋に、窓からは低い朝日が差し込んでくる。ザラはアール系系の褐色の肌をしている女の子で、歳は伊藤と同じ歳だった。

「~~~~~, ~~~~~！」

「？」

「————！」

「？」

もうカナダに来て半月ほど経つというのに、よほど意識を集中しないとこの有様だ。決してマスターの手抜きではない。先方も意識してゆっくり喋っているらしいのだが、それでもまだ、あるいはそれだけに聞き取りにくいのだった。

生徒の間で広く信じられている話によれば、もともと真鶴が海外交流に手をつける際、候補地は4つあった。イギリス・アメリカ・カナダ・オーストラリアである。このうちイギリスは交通費が高すぎるという理由で早い時期から除外された。オーストラリアは距離はそう遠くなく、時差の影響も少ないが、特有の訛りが「英語研修」という目的を阻害す

る。アメリカは訛りに加えて治安が悪い。最終的に残ったのがカナダだった。でも訛りって点じゃどこにいても変わらないじゃない……伊藤は思うのだった。今まで受けてきた英語の授業がいざこうした実践の場に出てみるとまるで役に立たないことは、初日のバンクーバー国際空港で骨身にしみてよく分かった。空港内でかかる放送はまるでチンプンカンプン。文法の組み立てに意識を注ぎ込むばかり、余計しどろもどろになって意志疎通がいつまでたってもできない者もいた。むしろ割り切って、ブロークンなカタコトで万事を片付けようと試みる方がうまく行くということもよく分かった。「ぎぶ・みー・ちょこれーと」の世界である。

彼女にとって唯一と言っていい発散の場は、放課後のレクリエーションだった。ほとんどの場合スポーツで、言葉が要るのは最初の説明のときだけだったからだ。日ごと体に染み込んでくるブロークン・イングリッシュに、こんなでいいのだろうか？と複雑な不安を抱く彼女だった。

今回のPC（2保留）

高校 男子部 普通科

A組 （影山 翔） （勝 譲二） 貴志 参 竜野 了
理数科

H組 沖田 悟 菅原 絵馬 鳩山 平和

女子部 普通科

A組 伊藤 早苗 加越 京子 坂井 法子 初雁 つばめ

中学 女子部 A組 有明 みどり 井村 真知子 早坂 理絵 白根 こだま

その他のリアクション

・貴志参

状況を静観。

・竜野了

当座のあいだ少林寺拳法部を同好会扱いで設置。その会長に就任。顧問は剣道部顧問の兼任。空手部を退部。

・沖田悟

カビの培養が風紀委員に密告されて、再び実験機材一式が没収される。

・鳩山平和

菅原とガンガン女子部へ出かける。

・菅原絵馬

女子部で戦闘訓練を重ねる。模型部長選挙に立候補。

・伊藤早苗

カナダ短期留学中。

・加越京子

失意の坂井の慰めに尽力するが、鬱病が逆に伝染、やはり寝込む。

・坂井法子

結果としてはるなにされてやられたことでショックを受け、寮で寝込む。MFの方で「F-8隊の隊長」「F-4の平パイロット」どちらかを選べるようになったが、態度は保留。

・初雁つばめ

坂井の頼みで、宇垣の行動を逐一追跡報告。彼女は普段榛名と一緒に行動する（榛名艦隊の防空直掩…宇垣はニミッツ級空母「ハイライト」に座乗）ので、難は無かった。坂井並びに加越からうつ病が伝染しかけるが、海に出て発散。

・有明みどり

井村の「まや」の砲術係に転任。井村の副官に位置付けられる。

・井村真知子

初雁に「地下鉄のポスター」を描いて渡す。

・早坂理絵

井村真知子の飛行教官を始める。

・白根こだま

F-15Dの課程を終え、RF-8E（改）を割り当てられる。坂井法子の監視を強化。はるなどの「空戦」について写真とレポートを提出。

知ってて得する真鶴豆知識

・カナダ人留学生…今度の終了式の時、来日します。卒業式に来賓として参列した後、京都・奈良・大阪を見物して、それから東京に戻ってきて、真鶴での寮生活に入ります。この時、こっちからの留学生は優先的にルームメイトとなり、全面的にサポートすることを要求されます。

・RF-8E（改）…中学風紀委員だけが持つ超音速偵察機。ノーマルは武装は一切できないが、このタイプはサイドワインダー系のミサイルを4発まで装備できる。高校ではRF-4Eにレベルアップする。やはりサイドワインダー系が4発つめる。主目的は模型部活動中の「故意の」危険行為について、証拠写真を撮影し制止に入ること。従って技倆は割と上。ただし制止については、強制はされていないので普段はされない。

校長から

カナダシナリオは、前回「カナダに行く」と言った人だけです。要は伊藤さんだけ。私らがあっちへ最後に行ったのは高1の夏期英語研修だから、もう忘れたり、誤ったイメージの方が強かったりもするのですが…とにかくチャレンジでやんす。

小西さん、行動については、「何をやっていいのかわからない→何も書けない」という

ストレートな図式はあたらないんでないかな？これはまず、「何しにカナダへ来たか」という前提を立てると比較的楽に考えられると思うのですが。実際、「スラムへ行く」とか、あとは法に触れるようなマネさえしなければ何でもアリの世界ですからね。……ただしヴィクトリアには、いわゆる「スラム」はありません。むしろ新宿とかの裏通りの方がずっとヤバい位で。とにかく、今回の前半は日本に絶対帰れません。強制退去というテもありますが、その時は同時に退学処分ですから、充分覚悟して下さい。

では、今回は3月後半です。20日ごろ春休みに入ります。このギリギリ一杯の頃に模型部長選挙の投票があります。それについては↓参照。

※部長選挙について。

PCからは菅原絵馬君が立候補しました。他に、次の人たちが立候補しています。

- ①山本深雪（女子部・新高2F）現女子剣道部長。織細。字垣の手下No.3という噂が立っているが、本人は否定。模型部幹部を除くと、女子部内では実力ナンバー1。
- ②高松京太郎（男子部・新高2A）現生徒会副会長。文武両道・美形。当確一番。中立。
- ③馬越道夫（男子部・新高3F）現管弦楽部長。豪放快活。風紀委員のシンパという噂が立っている。

皆さんの投票数を基に、菅原君も含めた4人の得票数を各人の能力値から算出して、当選者を決定します。

次号のBlowersについて。

田中ヤグアル真人の進路は結局未定なのですが、次号（8号）の編集は彼が担当します。ただし原稿・投稿物の窓口は私こと菊地です。システムがシステムなので、皆さん締切りは厳守するように。大まかですが通常との対比表を示します。

（通常）

原稿（及び真鶴のキャラシート）が出揃う⇒真鶴リアクションの作成⇒ページ組合せの決定⇒印刷製本⇒発送

（今回）

原稿（及び真鶴のキャラシート）が出揃う⇒真鶴リアクションの作成⇒ヤグアルに渡す⇒ページ組合せ決定⇒印刷⇒菊地に戻る⇒製本⇒発送

今回の原稿締切りは、5月8日です。

☆空技主催RPG会合のお知らせ

念のため15ページにも書きましたが、私こと菊地は箱根に温泉つかりに行くついでに、同地で蓬萊RPGをやろうと思います。買ったワりに空技のメンバーはやりたがらないので、こういう時でもないチャンスはないし。一泊二日で、会費は2食付き5～6千円の予定。予約の都合があるので、今月中に参加調査を済ませます。行きたい人は言って下さい。キャラメイクからやるので、初めてでも安心です。

秋葉原QUEST

先日秋葉原を探険してきた。秋葉原といえは電気や電子関係の製品はもちろん、部品、加工工具、基盤、IC等手に入らないものはないという伝説を産む程の驚異の電腦都市である。今回私は、その兵力をいずれ攻略せんとするための偵察に赴いた。目標は、パソコン、ワープロ、SFC&PC-E-Duo、TV、VTRデッキ、LDプレイヤー、VTRテープ、IC等（要するに趣味に走ってる訳だ）であった。しかし私は筋金入りの方向オンチのため（十年来住んでる家の近所で迷子になったのが2年前）事前に配置図を入手し、作戦日程を決定した。

——そして某日、作戦が実働された。天候晴れ、1100時に作戦開始、終了は、1830時であった。作戦開始が当初より遅れたが作戦は、7割の成功と判定された。

現地突入は、地下鉄日比谷線を使用。座席を確保するために（せこい）東横線元住吉駅で始発電車を寒中待つ。車内で揺られること約40分、現地到着。到着後は手近にあったロケット本店を橋頭堡として偵察を開始した。

悲しい性

とりあえず最上階から偵察開始。最上階の展示は、パソコンである。そこで何となく目についたX68のディスプレイになんと！あのグラディウスⅡが映っているではないか！私はかつてこのSTGにハマりまくり、左親指をイカれさせるまでプレイしたことがあるのだ！しかもこのソフトはMIDI対応である！残念ながらジョイスティックではなく十字コントローラー入力だったが店先で茫然としているだけでは脳がない。さっそくプレイしてみる。平日を選んで来たことが幸いして店に他の客がなくプレイを満喫することができた。

マシンの性能と完全なオプションに加え、デキのいいソフトハウスと3拍子揃ったことが原因といえよう。このグラディウスⅡは、グラフィックス、スクロール、ゲームバランス、サウンド等全てに渡り筆舌に尽くしがたい完成度を持っていると私は認めずにいられない。こういうソフトを見るとX68ユーザーが実にうらやましく見えてしまう。MIDI音源

に陶醉している間に何機のビックバイパーが撃墜されたことか。店先であることを忘れ思わず2時間も燃えてしまった。ふと当初の目的を思い出し、コントローラーを置く。この時ふと横をみて物欲しそうに私を見上げていたガキと目が合ってしまった。ガキをよそに一人アツク盛り上がったこの時の自分の虚しさを私は一生忘れないだろう。（きつとウオーとか畜生！とか言っていたんだろうな）

ラーメン

気が付くと3時。昼を食べ損ねてしまった。そこで秋葉原では結構おいしいと評判のラーメン屋に足を向ける。初めてだったので場所が分からず多少迷ったが、すぐに到着。なんと3時にもかかわらず店には、列ができてた。店名は、「じゃんがらラーメン」（だと思った。）店が小さいのでお客が入りきらない。そこで止むを得ず私は、相席で我慢したが目の前はアベックだった。しかも食べ始めたのが私の方が早かった。これをいい事に普段より30ホンは大きい音で麺をすすり、わざと口を開けながら噛む。そしてゴホッと咳して麺をベチョとスープへ戻す。——をえげつなくえげつなく繰り返すが、残りはスープのみ。これでもかこれでもかとはばかりに音高らかにジュジュジュとすする。熱いものを食べればハナが垂れるのは自明の理。垂れたハナ水顔をわざわざアベックに見せ付けるかのようにあげる。（もちろん表情は、ニヤッとしている。）こうなるとアベックは私の術中に完全に翻弄され、それまで交わされていた会話が完全に沈黙してしまった。こうなったら蛇に睨まれた蛙である。そしてより汚い音でハナをかむ。そう、汚物が見えるように。こうなると店員さんからも白い目。疾風怒濤の進撃は、引き際を心得ていなければ完璧な用兵とは言えない。（W.Mittermeyer 言）私もそれを実践し、足早に店を去ったのだった。

肝腎のラーメンの味を書き忘れた。麺は、細く、スープはとんこつ。麺だけやスープのみのおかわり、具のトッピングができる。味は人の好みによるだろうが私個人としてはまあ食べられるラーメンと言っておこう。量が少ないのに料金は並みと不満はあるが、秋葉原は飲食店が極端に少ないのでこれで満足す

るしかなかり。ただし評判の割に店が小さいので食事時は避けないと行列に加わらなければならなくなる羽目になるので注意。場所は、JR秋葉原駅前通りを上野方面に歩き、電気店「X-ONE」の角を曲がった奥。

値引き率の怪

メインストリートから外れたところにその店はあった。店頭の商品の割引価格が表示してあったので見てみたが一瞬我が目を疑った。文豪MINI 5 SXがなんと¥103,000! 定価は確か20万ぐらいしたと思った商品がこの値段。もちろん中古品でも欠陥品でもない。れっきとした新品である。この店は商品が最低30%以上 OFFという驚異的安価。ここはTVのCMを見て来てみたのだがここまで本当に安いとは思わなかった! 店内に入ればその安い訳も納得できるが秋葉原に来たらこの店に足を運ぶ価値は十分にある。商品の値引きテレホンサービスもやっているのので聞いてみるといいだろう。番号は忘れたがTV東京17:30-のニュースのCMに番号がでるのでそちらで見るといいだろう。(地方の人、ゴメンナサイ)

作戦終了

結局安い店も見付けたし、店の配置も(メインストリート沿いに限って)大体把握したし、交通も確認した。ただしメッセサンオーとゼットの場所は分からなかったし、(誰か場所教えて!) ラジオ会館も攻略できなかった。これらに関しては後日再戦に臨む決心で私は秋葉原を去ったのであった。

結論: 秋葉原攻略には戦術目標が多すぎるため、店の駅周辺配地図が必要不可欠。土日・祭日を除かないと混雑して店に入るのも一苦勞。(特にゲームソフト関係) 電気関係の製品、部品、工具、資料等ほぼ手に入らない商品はないと言えるが、一部を除いて、特別安いという訳でもない。しかし電気関係に興味があるなら2度3度と足を運びたくなると言える。

コンピューターの値段

日本製パソコンはどうしてこんなに高いのだろうか? 米国製は486/33MHz CRT 付きで50万を切っているという話だが日本製は今だ386/16MHz で100万。台湾じゃ100Mのハードディスクが6万で買えるとか。お店に個人輸入を頼むしかないのだろうか? バッカヤローオ!

生産打切り

88の生産が先日打切りになった話を聞いた。うちには88VAとPR(中古)がまだ元気なのに。特にVAは、買ったのが2年前。もったいない気がしてならない。買うなら98がいいという人の話も聞かずに無理矢理親父が買って来た。BASIC もできない私には丁度良いパソコン練習台というべきか。妹はこれでこの前エメラルド・ドラゴンをやっていたが解いてしまった。(まだ中1) 親父はPRで三國史IIに燃える。そして私がファミコンなんかやった日にやもう雰囲気はソフト屋である。私は、いずれ98を買おうと画策しているが親父も反対はしないのでパソコンが3台になる日もそう遠くないかもしれない。

30億円

先日航空自衛隊百里基地所属のRF-4Eが墜落、乗員2名が死亡。この日フライト前にこのパイロットが同僚の実家の上空を飛ぶと電話予告していたことが暴露される。墜落現場はその民家からわずか300mのところだったとか。たった一瞬の事故でRF-4E購入費の税金¥30,000,000+αがパァである。この数日後には陸上自衛隊の第一空挺団所属ヘリが東京湾に墜落、乗員2名が死亡。この前は、同じ陸上自衛隊の輸送トラックが一般道を走行中に暴走して海に転落、やはり乗員2名が死亡している。冷戦が終結しても自衛隊がある限り彼らは税金で買った装備を使用し、税金で賄われた燃料を燃やして飛んだり走ったりしている。PKO法案可決もそう遠くないようだし、こう事故続きじゃ税金ドロボーの汚名返上がつらいぞ。しっかりしろ自衛隊!

奇跡の42

1/30正午近く、大阪府である歯科医が自宅玄関先で3mの至近距離から左胸を拳銃で狙撃される事件が起きた。しかし被害者は、奇跡的に無傷だった。左胸の内ポケットに入っていた2つ折り皮財布が防弾チョッキの変わりを果たしていたのである。ちなみに1万円札20枚を含む紙幣42枚が財布に入っていたとか。

紺野 紫楼の近況

今まで放ってあったファミコンRPGに3年位ぶりに燃えてRPG三昧の毎日です。DQ IVを4日間ノーヒントで解き、現在は、中古のファイナル・ファンタジーIに燃えています。

ORIGINAL

■ PINK GIRL & GREEN BOY ■

20名の執筆者にいる男の子・女の子のイラスト本
 A5 オフ P44 表紙 2色 (両誌とも)
 1冊 500円 (カ7セ) + 62円 (切手)
 2冊 900円 (カ7セ) + 10円 (切手)

■ GOLDEN AGE ■

ただのり子個人誌. マンガ. イラスト etc.
 A5 オフ P36 表紙 2色
 1冊 300円 (カ7セ) + 175円 (切手)



申し込んで
 くたさつた
 皆様. どうも
 有難う。
 本は無事
 届きましたか?

■ オリジナル便せん ■

B5 両更7ラフト 一色刷 オフ
 1セット 2種 × 6枚入 100円 (カ7セ)
 送料 1セット 175円 2~3セット 250円 (切手)

PARODY

■ 虫の本 ■

手塚治虫先生のヨイショ(?)本. 安いの
 (ク〜ナ?) 色んな市に見て頂きたいです。
 A6 コピー P20 1冊 千返 62円切手2枚

■ ハロウィン ■

「カレヲ舞う!」の三人誌. 興味ある方よろしく
 A5 オフ P60 表紙 2色
 1冊 600円 (カ7セ) + 10円 (切手)

■ フラック. ジャック便せん ■

コピー 色上質紙 (2色) 一色刷
 1セット B5 (1種) + B6 (2種) 各8枚入
 1セット 千返 300円 (カ7セ)

■ 始せんはここに居る(仮) ■

「創竜伝」の始せん中心本. お笑いで。アツク
 A6 コピー P20 ↓ 千返 200円 ↓
 夏以降に同じ合わせて下さい。... お願い



マンガも
 描くと
 何やっ
 だな〜

↑
 またくである

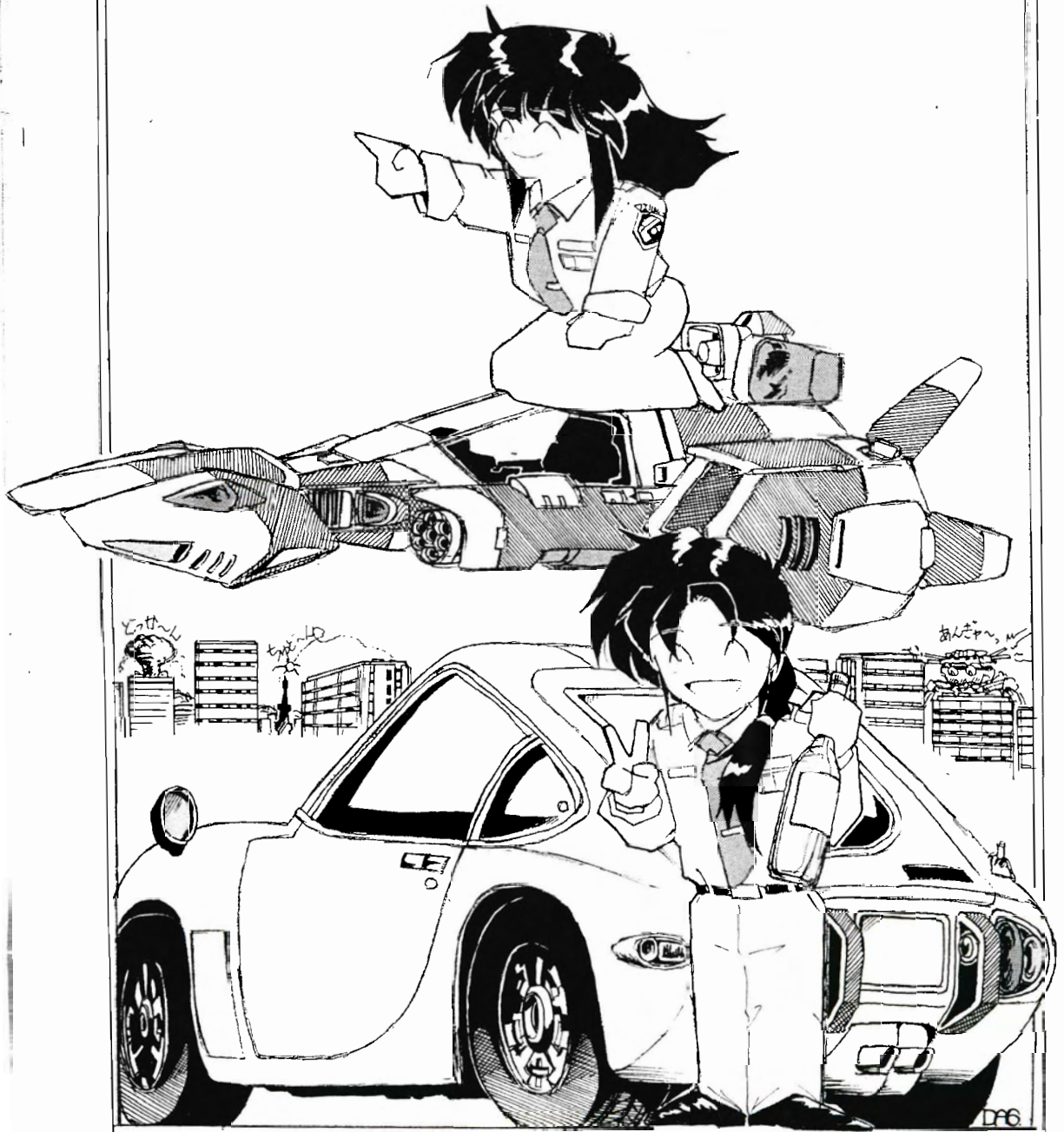
新住所が決定しましたので再度宣伝させて頂きます。
 買いなびれた方は(いな〜ぶ)3年間の確実
 にこの住所で大丈夫です。どうぞよろしく。待つます。

新住所



REAL PRINCESS MARY

STORY: Koji Motoori & Art: DARIUS 6



(前回までの粗筋)

都市機能のほとんどを破壊され、地球は無秩序状態に陥った。破壊の魔手は人類第二の大惑星、シリウス本星に延びる。ICPOの捜査官 尼崎摩耶はひよんな事から星間輸送の無事をするが、ヤーニヤ・モロフォビッチは破壊の元凶究明で泥沼にはまっていた。摩耶は何か閃いたようだが、どうする気なのだろうか。

7 (承前) : ヤーニヤが気付いたときには、もう朝になっていた。どんなに街が破壊され、機能を喪失したとて太陽は昇り、万人を照らす。当然の摂理だが、何故かその日のヤーニヤには不思議に思われた。

何とはなしに窓に立つ彼女である。神の存在を信じる者は、こういう時に信仰を新たにするのか、と感じる。

東京の混乱は———ニューヨーク、ロンドン他の大都市でも大同小異だったが———時のデマほどひどくはないようだった。引っくり返され、焼け焦げた車も、まるでずっと前からそこにあったかのようだ。路上に光る小粒は割られたショーウィンドーの残骸だろうか。事件当時あれほどいた暴徒の姿は、今はどこにも見当らない。時折サイレンを鳴らして飛び回るパトロール・スピナーの姿がどこか滑稽でさえあった。しかし本当に怖れるべき「パニックの揺り戻し」はこれからすぐ来るだろう、ということは容易に予想がついた。その辺は革命と弾圧の地、ロシアに生まれ育ったヤーニヤに備わる天性の勘である。勃発、鎮静、そして揺り戻し。この手の暴動のパターンだ。桜田門が焼き討ちにあうまで、さて、あとの位だろう。

摩耶はその頃、半分ほど空になった150年ものの泡盛の一升瓶を抱えて、渋谷の飲み屋で高いびきをかいていた。

情報の止まった彼らの知るところではなかったが、ちょうどシリウス本星は破壊の渦中にあった。プロセスは地球の時と同じで、重要中枢だけが一瞬に沈黙状態になったのである。

実はこの時、運輸公社の貨物機が一機、ギリギリのタイミングで出発に成功している。後々これが大きな意味を持つようになるとは、まだ誰も知らないことだった。

8 : 摩耶がICPOに顔を出したのは、昼前になってからである。着たものは前の日と同じだから汗臭いし、それ以上に酒臭い。そうなる他に「宿酔」という言葉が続きそうだが、ヤーニヤの見たところ、摩耶はそれとは無縁らしかった。

むっとする臭気に顔をしかめるヤーニヤに、彼女は言った。

「地下鉄が動き出したわよ」

「あ、そう」

表情は変わらない。その顔をのぞき込みながら、摩耶は続けた。

「運輸公社は人力で便の半分を維持してるわよ」

ブースの中に酒と汗の臭いがたちこめる。そして今また、体中の穴から大脳を直撃したアルコールの臭気で、ヤーニヤはぶつつりキレた。

「マヤッ！すぐシャワーを浴びてきて！今すぐ！」

例によって例の通り、固有名詞の「マヤ」以外すべてに渡ってロシア語になっていたのだから、摩耶にはてんで通じなかった。何を怒っているのかといった態できよとんとなった彼女に、ヤーニヤは再び、標準語で一言一言区切って言い直した。

「は、や、く、こ、の、ニ、オ、イ、な、ん、と、か、し、て！」

「ああ、臭かった、やっぱり？」

あっけらかんとした摩耶の反応に、ヤーニヤはうんざりせざるを得なかった。長時間の頭脳労働、しかも徹夜後である。疲労感もひとしおだった。だからこそ次の揺り戻しも早い。

「やっぱりじゃないっ！」

引き出しから小型のレイ・ガンを引き出したり出して、摩耶に向ける。射撃の腕は悪いが、その辺だけはさすがに本職、割に素速い、さすがに悪いと思っただろう、日本民族特有のニヤリとした表情で、彼女は後退りしてブー

スを出て行った。後に残されたのはヤーニヤの他に数人の捜査官と、がらんとした課の部屋。そして酒の臭い。何かしら空虚が漂う。

しばしためらった後で思い切って蛇口をひねった時、期待外れにもお湯が出たことに、摩耶は気を抜かれた。

「あっちっち……」

大して熱くはないのだが、それでも冷水が出てくるとばかり思っていた彼女には別だった。

「大分直ってきたんだな……」

この頃になると金融・物流などのネットワークも続々回復しだしていた。給湯系の管理回路ははじめから何ともなかったが、事故以来ずっと水道をいじらなかつた彼女はそのことを知らなかつた。それでなくてもあの被害状況を目のあたりにすれば、ふつう水道が無事とは考えられない。

ロッカーに備え付けてあった紺色の礼服に着替えた摩耶が戻ってきたのはそれから2時間も後のことだった。ヤーニヤが危惧して止まない揺り戻しはまだ起きていない。その頃にはヤーニヤのもとにも——スプートニクで



はなく、同僚のロコミで——情報ネットワークの復旧が伝えられていた。はじまりと同じように、突然回復したのである。唯一の例外は行政サービス回りだった。これに限っては本来のホストコンピューターに関係なく、「勝手な」動作をはじめたのだ。アイザックの影響であることは言うまでもない。これこそアイザックの地球征服の最終段階だった。社会機能のすべてがアイザックの指揮により動くことで、その目的は達成されるのだから。地球のすべてを支配しようとする企ては枚挙にいとまがないが、かつてここまでシンプルなものがあつただろうか。正に完璧とも言えた。

ただ彼らにはたった一つ、致命的な見落としがあつた。「スプートニク」とそれを操るヤーニヤである。

そのヤーニヤは目下、なお混乱の残る一般道を、摩耶の運転で羽田の運輸公社支店に向かつていた。狙いは勿論、例のハシケが事故を起こした現場へのチャーター機をせしめるためだ。とりあえず、現場に行く。そうすれば何か



手に入るかも知れない。とにかく外を出るのが摩耶の主義だった。それ故一度捜査にかけると、終わるまでに一足は靴がダメになる。今時珍しいタイプではあった。

車は摩耶のトヨタである。湿っぽい爆音を文字通り引きずって走るそれは、今のような状況下では余計に人目を引いた。ナビゲーション・ネットが怪しいというのでスピナーを止めたヤーニャだったが、上空を何事もなく快翔していくそれらを見るにつけ、後悔が新たになる。何しろ倍は時間が違う。

「おっそいわねえ」

そんな不満が口をつく。しかし摩耶は意に介さない。

「この銜中100キロも出す勇氣、まともなスピナーだって私ないけどね」

スピナーの法定最高速度は都市部で150キロ、地上車は80キロ。細い道路では40キロまで下がる。なぜそんなに違うかと言えば、スピナーが通るのが路上の空中だからに他ならない。勿論20m以上300m以下という制限付きだが。

「それにどっちにしても、空港周辺は路上走行だしね」

言うまでもなく空港内にスピナーが飛び込まないようにするための処置である。ヤーニャは何も言わずに目を閉じた。あと20分はかかる。徹夜だったのだから、別に今少し眠っても悪くはない。その辺を察してか、摩耶も何も言わなかった。

9：「……ですから、現在そちらに回せる機体はないのです」

「……ったってね！このIDが目に入らないの？」

「アマンザキさん、運輸公社の規則は御存知じゃないわけじゃないですね？」

むっとなる摩耶。もう少しでつかみかかるところだったが、運輸公社の職員はまた口を開いた。

「ICPOだろうと何だろうと、今は定期便のダイヤを復旧させるのに手一杯なのです。たとえ国連議長の命令だとしても、……テロリストが束になって来ようとも、無い袖は振れません。

どうぞお引取りを」

押し問答もそろそろ10分になる。ヤーニャは車で眠ったままだ。情勢はあまりに摩耶に振りだ。とりあえず彼女は運輸公社のカウンターを離れた。

もともと運輸公社は強力な権限を持っている。正式名は国連航空輸送公社、運輸公社条約加盟の各惑星に週最低1便を提供している。こと機体の運用については、警察の要請さえ無視できる。

ヤーニャはまだ眠っている。運転席の方から首を突っ込んで、ぼそりと言った。

「ヤーニャ、エクスプローラ壊れちゃった！」

これはてきめんに効いた。がぼと飛び起きた彼女はしたたかに天井に脳天をぶつけ、はっきり目を覚ました。

「悪い冗談は……」

「うーん、これは効きすぎかなあ？」

効きすぎどころの騒ぎではない。ヤーニャの動悸は収まらない。

「いま何時？」

「8時半ってとこね」摩耶は腕時計に目をやった。「……でね、エクスプローラで国連航空輸送公社の中枢に侵入してよ」

一部始終を聞かされたヤーニャは、結局摩耶に同調しなかった。

「無いものは無いのよ。ムリは言えないわ」

さすがにここまで来ると、摩耶も諦めざるを得なくなった。自分で情報操作を扱えないのだから仕方が無い。

その日の午後、じわじわとロコミで広まっていた噂を、摩耶たちも耳にすることになった。

「シリウスがやられたらしい」

ヤーニャが恐れていた「揺り戻し」の引き金は、これだった。再び地球の各大都市は恐慌状態につき落されたのである。最初のパニックから、ほぼ24時間後のできごとだった。(続)

～ 一 等 喫 煙 室 ～

岬：今回はメカの話ということで。とりあえず親父。一言切り出してくんない？

菊：あ。

岬：……あの、なあ。

菊：おまえ仕切れよ、こっちゃん忙しいんだから。

岬：忙しいって、ワープロなんだから口は空いてるだろ。

菊：頭が回らん。PPMのゲンコ打ちで手一杯！俺入れるんなら後にしてくれ。

岬：そういう時だからいいんじゃないか、

岬・宇垣・笠原：**ねえ～**」

菊：「ねえ」じゃない、「ねえ」じゃ。

宇：今回私のZⅡのこと書いたでしょ。オイルだけじゃなくってね、ランプも変えてあんのよ。オリジナルじゃ暗くって。……保安部品はどんどんチューンしてくつもり。

笠：いいなあ。私いまだにチャリよ。

岬：いいもんか。族まがいじゃねーか。

宇：またすぐびがむ。改造ってーと族とすぐ直結するのは、短絡過ぎない？

菊：短絡じゃないだろ。メカってのは、設計通りの使い方をして初めてメカとして機能するもんなんだから。いじらなきゃなんねーのは、欠陥品だよ。

宇：より良くしようって発想は無いかねえ？

菊：そりゃぜいたくってもんだーね。族といつしょだよ。

宇：ぐう。

岬：何だかんだ言って、結局口挟んでんじゃーねーか。

菊：あ。いかんいかん。……えいクソ！やってられつか。入るぞ入るぞ。

笠：ねえ、それ（PPM）って結局どうなんの？

菊：それが決まってるじゃ苦労しないって。はじめ8話かそこらで終わって、別のに行こうと思ってたんだけど、多分ムリだね。「ヤーニヤを苦しめたってくれ」とか手紙が来るのはいいんだけど

岬：それってファンレターじゃん！これからは「大先生」って呼ばなきゃ。大先生！

菊：よせやい。（←照れたりしている）

宇：あれってさあ、はじめサ（ピー）スに反抗する意味で書いてたんじゃなかったっけ。どっか他の学校の会誌にも同じ基本設定で書いてたけど。

菊：んだよ。

宇：今ぜんぜん変わんないじゃん。コンピューター主体でさあ。

菊：だーいじょうぶだって。ちゃんと、人間主体に戻るから。実は次の話で、ヤーニヤのお仕事は当分消えちゃうんよ。

笠：いいの、そんなこと言って？

菊：そ、こ、が、「テクニク」なんじゃんか。どう消えるか言ってねーやろ。

笠：ハンハン。（註1）

岬：越前屋（註2）、お主もワルよのう。

菊：放っとけ！

註1：鼻にかかった、フンフンとの中間の音。 註2：菊地は福井出身なので。

後記

菊：いろいろと責任を感じる、春です。
宇：タカさん、藤沢に来たら、一緒に厚木ウォッチングしましょうね♡もちバイクで。
岬：親父の精神関係は、ブースター付きです。皆さん言い回しにはご注意ください。
長：ESは和歌山から引っ越すらしい。寂しくなるなあ。あとスタッフは淵上さんだけか。
笠：空技のモットーは「Bolt, Nut, & Steam」なんだそうです。…何のことやら。
紺：駅で「間もなく電車が参ります」の放送を「戦車が参ります」と聞き間違えた。嗚呼…
D：…頭痛え。
E：表紙はいかがなものでしょうか？小説は次回からスタートします。ただのりな師匠の「THE WIND」に期待大。

Staff

編集長：菊地研一郎／編集補佐：宇垣麻美
笠原和子／筆者：長船吉光 本居こじ
紺野紫楼 岬当麻／絵：ただのりな
EPST-DARIUS 6 (脱稿順)

Blowers 第7号
第3巻第3号(通巻8号)
平成4年4月8日発行 代価300円
(送料別)

編集人 菊地研一郎
発行人 菊地研一郎
発行所・印刷所 「空技廠」

※本誌記事の一部または全ての無断使用を禁じます。

今月の表紙
スタブレCD&ビデオ化記念！
STAR BLADE再び！
画：EPST-DARIUS 6

今月の裏表紙
ただのsan's後記

次号は5月初頭発行予定です。
あ、GWか。こりゃいつになるやら…
(↑あのかなあ！)
なお、原稿メ切は5/8(厳守)です。

あぁ、すみません。下書き3Pしか
出来てません。仕事始まっちゃうれ。
こりゃーいつ上がるか見当もつかない。
ぶでもたぶんおきます!!と誰か信じるのE?

下Eのり+挿

ごめんな
さーいっ

